



<論文>自閉症児を持つ母親への援助：
子どもとのかかわりの接点を求めて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 亮 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011389

自閉症児を持つ母親への援助

——子どもとのかかわりの接点を求めて——

井 上 亮

1 はじめに

本論文で取り挙げる自閉症概念については、早期幼児自閉症 (early infantile autism) として Kanner, L. (1944)¹⁾ により初めて報告されてから40年余りが経過しようとしているが、今もってその病因論、治療論は統一を見るに至っていない。さらに自閉症児の呈する様相も時代の流れの中で変遷してきており、筆者の10年の経験の中で見ても、その当初からすでに Kanner, L. の言う純粋な早期幼児自閉症は少なく、症状的に軽度ないわゆる「自閉傾向」児が主流を占めていた。ところがそれもこの数年来急速に減少し、三歳児健診の中で見出されることも稀となり、かわりに言語もある程度獲得しており、非常に表面的ではあるにせよ一応の対人的かかわりは可能な、しかしそれ以上には深まっていけない新しいタイプの障害児がふえている。この群について筆者はいまだ統括的な見解を述べる準備はできていないが、診断的にはもはや「自閉」とは言い難いこと、ただしその心性を理解する上では自閉傾向の延長線上もしくはその辺縁に位置すると考えている旨は述べておく。

かように自閉症とその周辺をめぐる臨床の現場は流動的であるが、治療的アプローチは子供の側と母親の側の2つに分けて考えられる。筆者の自閉症児治療の考え方の一端は、井上²⁾ (1979)、³⁾ (1982) の中にすでに報告してある。母親面接については、あくまでもカウンセリング的側面を重視する立場にあり、山中⁴⁾ (1976)、村瀬⁵⁾ (1980) の優れた報告が参考となろう。

ところで今回ここに報告する一文は、母親とのカウンセリング的出会いの中からではなく、筆者の7年にわたる心理判定 (療育手帳)、発達相談の中で出

会ってきた延べ300組の自閉症児とその母親達と共に考え学んできた結果をまとめたものである。また1例ではあるが、筆者が家庭教師として自閉症児に7年間かかわってきた中から学んだものも含まれている。

我々が患者やその家族と出会う時、その出会い方に応じてそこに立ち現われてくる事柄の諸相はおのずと異なってくる。心理療法場面と発達相談の場面では、アプローチが異なってくるのも当然の成り行きである。

発達相談の場面では、どちらかというとな家族が自閉症児と共に日々の生活を暮らしていかなければならないといった日常的な現実が大きな比重を持ってくる。定期的な治療に通ってもらえれば良いのだが、時間的、経済的な制約があるし、何よりも治療機関と治療者の数が圧倒的に少ないのが現状である。都道府県によっては就学までは療育制度が整っていても、その後のアフター・ケアにまでは手が回らない。

日々、子供のパニックや自傷行為、多動に振り回され疲れ切っている家族（特に母親）は多い、それでも彼等は暮らして行かねばならない。そうした家族に我々がどうかかわるかは重要な問題と思われる。

intensive な心理療法の中で現われてくる世界も自閉症の一つの真実を表わしているが、家族の暮らしの方向から患児を透かし見た時、そこにもやはり自閉症の一断面を見出すことができるものと思われる。

2 子供との意味あるかかわりを継続させる為の基本姿勢

自閉症児を持つ母親の多くは、子供への対応に一日中振り回され肉体的にも精神的にも疲れ切っている。「目を離すとどこへ行って何をするか分らない」と一日中子供の後を追っている母親、同一性保持を何とかやめさせようとして空しい努力を繰り返す母親、言葉を憶えてもらおうとしてその訓練に明け暮れる母親、それぞれに事情は異なっても一日中子供にかかりっきりになっている母親は多い。子供が学校に行って家に居ない間は、「どうしたら子供が良い方向へ変わってくれるのか?」「将来どうしたらよいのか?」など思い悩みながら過ごしてしまい、結局一日中子供のことが頭から離れない。しかもそうした

日々がいつ果てるともな続くように思われ、将来の不安と苦悩も予め先取りして背負い込むことで一層疲弊の度を深めてしまう。

こうした母親の中に神経症的不安が加味されているケースも認められるが、多くの場合懸命に子供と取組もうとしている母親ほど前述の状況に陥り易い。しかも子供のしている事の意味をつかめない不安、期待したような変化がなかなか起きないが為のあせりと苛立ち、なぜ自分だけがこうした運命を背負わねばならないのかといった思いから、ついつい aggression を子供にぶつけてしまい、その事でまた罪責感を深めてしまう。そしてそれをあがなう為にも「もっと子供の為に頑張らねば」と深刻な悪循環に陥っていく。なぜならこうした不安とあせりと aggression は、ただでさえ乏しい子供の安全保障感 (security feeling) (Sullivan, H. S. 1956)⁶⁾ を脅かし自閉的防衛の強化、あるいは逆にその防衛が破綻に瀕し危機的反応としてのパニックや自傷行為を招来しかねないからである。

こうした事態に至っている家族に対し、いかなるアプローチが可能か。これほど危機的状況に陥っていない家族においても類似の悪循環が認められるのが一般的である。そこに見出される「かかわり」の質は、皮肉にも双方にとって有害な作用を生じ易い。それでは意味のある（双方、特に子供にとって好ましい progression を可能ならしめるような）かかわりを日常的にある程度保障する為に家族、特に母親にいかなる基本姿勢が期待されるのか。

まず最初に「子供はすぐに変わるとか治るというものではありません。ただし家族の方の努力により徐々に変化していきますから、その一つ一つの変化を大切にしていきたい。」と伝える。我が子がすぐに良くなることを願わない母親はいない。それ故に前述のような行動が生じるのである。しかし臨床的現実として自閉症児が治っていくには、一つ一つのプロセスを踏んで行かねばならないし、数年にわたる長い時を要する。したがって母親が今後担うべき仕事の長さを伝えるところから始めるのが適切である。そんな時、多くの母親の顔には軽い驚きと一種の解放感にも似た表情が一瞬横切る。（すぐにでも解決を迫られていると思っていた問題が、実は一気に乗り越えられるべき性質のも

のでないと知った時に感じる奇妙な安堵感、しかしやがてその後の長い道のりに思いをはせ新たな覚悟に身の引き締まる思いがしてくることがあるが、あの感じを思い起こしていただきたい。）

次に、「子供と密に接する（遊ぶ）時間を1日15分か30分に限定し、時間帯も決めておく。それ以外の時は、子供の事を考えないように心がけて下さい」（これはあくまでもある症例検討会における山中〔1981⁷⁾〕のコメントに範をとっているが、時間の長さや全体のニュアンスは若干異なっているかもしれない）これに対してはほとんどの母親が「まさか？」と耳を疑がう。確かに逆説めいているが、一日中イライラして子供に接しているより、この方が双方に良い影響を及ぼす。実際問題として1日15分にせよ真剣に、しかも適切に子供に接し続けるには、大変な労力と心的エネルギーを要する。（遊戯療法では週に一回50分会うだけである。だからこそ子供に対し積極的関心を持ち続けられる事実を思い起こせばよい。）

「時間帯を決めて」というのは自閉症児の同一性保持傾向を考慮してのことである。「それ以外の時は子供の事を考えない（むしろ忘れる）ように」と言っても、無論ほとんどの母親は忘れることなどできない。実際ある母親の述懐「いつも子供の事を考えてないと悪いような気がする」に見られるように罪悪感深く、それを少しでも和らげる為に「いつも考えている」面も見逃せない。そうした状態では真に考えることなど難しく堂堂巡りに陥りやすい。したがって「考えないように、忘れるように」と言われることで、以前より少しは安定して考えられるようになれば良いわけである。

さて次に「子供とかかわる時は、こちらが楽しいと思える間が限界です。イヤイヤつきあっていると、子供にはその気持の方が伝わってしまい、かえってマイナスに作用することがあります。ですから親の側も楽しめるような工夫をして下さい。親が楽しめていれば子供も楽しめており、その方が良い結果をもたらすようになります。それに子供にとって楽しむことは、言ってみれば心の栄養のようなものです。」

この提案に対しても意外さと驚きの表情が返ってくる。「親が楽しむなんて

考えてもみませんでした」「こちらがイヤイヤつきあっていると、確かに子供は去って行ってしまいます。それを見てまた苛立ったり落ち込んだりしていました。」

前者の発言に見られるように、自閉症児を持つ家庭では心のゆとりが失なわれがちになり（ゆとりがなければ楽しめない）、さらに加えて楽しむことに対する罪悪感も認められ事情は複雑である。実際、楽しめるようになるにはそれ相当の創意と工夫がいるし、母性の開発がなされていなければならない。しかし、この「楽しむ工夫」は自閉症児の子育てを考える上で重要な鍵となる。なぜなら、それまでの子育ての中で苦悩と挫折感のみを味わわされ報われることの少なかった母親は、自信喪失と罪悪感の中に沈殿して行き、その結果子供との心的距離が一層縮まり（これは精神的視野狭窄を起し、心のゆとりを奪い、乗り越え不能感に人を追いつめる）、ついには子供と一緒にいること自体が破局状況（catastrophic condition）となりかねない（母子心中まで考える母親は多い）。

そこで少しでも「楽しむ工夫」をしてもらうことで（しかし「とてもそんな気になれない」「それどころではない」「それができたら苦労はない」と深刻な状況に置かれている母親達がいるのも事実である。カウンセリング的支えが望まれるところである）、子供とのかかわりの中にささやかな楽しみの部分を見出してもらう。楽しみを通してゆとりは生じてくるものだし、子供との心的距離の柔軟性も生まれてくる。そして何よりも子供の方に良い影響をもたらし易くなる。このささやかな成功体験の積み重ねが実績となり、母親に少しでも子育ての楽しみと自信を取り戻してもらえれば、今後取り組むべき大きな問題（子供に関する様々な事柄、自閉症児と共に歩んで行く自分の人生をどう位置づけ受け入れていくか等）に立ち向かうに際しての耐性（tolerance）と力を準備づけていく上での一助となろう。

3 日常生活の中で子供とどうかかわるか

本章では前述の基本姿勢を踏まえた上で、具体的な個々の問題に家族、特に

母親がどう対応していったら良いのかについて考察を試みる。

以下、主として自閉症児の呈する各種症状を中心に論を進めていくが、その前に“人が症状を持つ”意味について若干触れておく。症状は一般に negative なものと考えられているが、症状を持つのも一つの生き方であり、それ以上の重篤な破滅的状况を回避する為の^{せい}生の戦略となっている面を見逃せない。つまり症状を持つことで辛うじてバランスを取りながら生きているわけである。

したがって無闇に症状を除去しようとする立場には賛成できない。そうではなくて今子供がその症状を呈することで何を守ろうとしているのか、その症状にはいかなる意味が秘められているのか、そして何よりもその背後にある人間存在の痛みをどこまで共感できるかが重要になってくるわけで、そうした立場からの援助でなければならない。

3-1 子供への接近

名前を呼んでもこちらを振り向かない、そばへ寄ればずっと去って行く等、まさに取りつく島のないような子供は多い（これは母親にとっては耐えられない現実である）。しかし、その無関心さの背後には Bettelheim, B. (1967)⁸⁾ がいみじくも指摘しているような「他人に対する絶望の深さ」が潜んでおり、「煮えたぎる無関心」と呼ぶにふさわしいものがある。しかし他人とのかかわりは絶望的で破壊的なものばかりではない事実を体験してもらうことも重要である。そして母親にとっても、子供とのかかわりが十分に可能なことを体験を通して知ってもらわねばならない。

例えば子供に声をかける時でも、そのタイミングを計らねばならない。何かに気を取られている時（それ以外のものは心から消え去っているかのようである）、多動 (hyperactive) 傾向を有する子が動き回っている時等に声かけをしても、子供の心には届かない。気を取られていた事象や対象から別のものに移行する時、多動児がふっと動きを止めた時を見計らって、そっと子供の耳にではなく心に話しかけるようなつもりで声かけをする。するとこちらに注目する。しかしかすめるような形でしか反応は返ってこない（こちらを一瞬チラリと見

るだけとか動きを少し止めるだけである)。ここで重要なのは、それ以上“深追いしない”ことである。自閉症児における対人刺激の許容量の限界は低い、それをよくわきまえた上で尊重して行かねばならない。したがって子供の側に“逃げる自由”を保障する配慮が必要となる。

次に子供へのより具体的な接近法であるが、子供がオモチャか何かで遊んでいる時に、正面に位置するのではなく（正面は対人刺激が強過ぎる）、横かあるいは斜め後につくのが良い。そしてまず子供がしていることを黙って見守るのである。場合によっては子供の横で同じ事をしてみても良い、それを通して子供がしている遊びの意味とか（一般に自閉症児はオモチャをオモチャとして扱うような遊びはしない）その時の子供の気持やどこに興味を見出しているのかを味わい感じ考えてみる（味わうのを旨とし、知的理解に流れる傾向をみずから戒めねばならない）。そしておぼろげにせよ解ってきたら、子供の遊びにかかわって行っても良い。その際、少し違う要素を加味して presentation してみる。もし子供に拒否されるか、あるいは全く乗ってこないのであれば、まだ早過ぎるか、もしくは子供の気持を読み違えていたことになるので、元の段階に戻したら良い。もし受けいれられれば、少しずつ変化をつけたり新しい要素を加えていくことになる。

これは結果的に Piaget, J. (1945)⁹⁾ の言う同化 (assimilation) や調節 (accomodation) の作用に相当し、(新しい) シェーマ (schema) の形成、その分化と発展、統合に寄与する。一方、親の側から見れば、いかに子供の気持を共感的に理解する努力を積み重ねても、同じ事柄の繰り返しに興味と積極的関心を持ち続けるにはおのずと限界があり、モチベーションを維持する為に、そして子供とのかかわりを楽しむ為にも新しい局面を開いていく必要がある。

例1. ラウンド・ベルをひたすら回転させ、じっと見つめ続けている子（自閉症児は一般に回転物に興味を持つ）に対し、回転しているベルにバチで軽く触れ音を出してみる。すると子供もバチを手にして同じように音を出す、今度はリズム打ちをしてみる。子供もまねる。音階や打ち方等を通じて色々なパターンを試みしてみる。いつしか子供の表情が柔いであり、かけ合いの遊びを確か

に共有している感じが出てくる。そして子供が歓声をあげるようになれば、それはもう楽しい遊びとなっているわけである。

この時の注意点、母親が陥り易い悪循環は、子供に早く良くなって欲しいと思うあまり、教育的、訓練的色彩を強め過ぎてしまう。すると子供の遊びの文脈と母親のそれとの間にずれが広がってしまい、子供が乗ろうとしなくなる。そこで母親が躍起になって自分の文脈にはめ込もうとして押問答的状况となり、必死の努力は空回りになってしまう。だから、あくまでも子供の文脈に沿って進めていくのが基本である。

ところがその際母親が強引に子供を引っぱっていけば、それに抗し切れずに従う子もでてくる。しかし自発性を犠牲にした受動的な子供になってしまう可能性を否定できない。これは自閉症の精神療法的立場から見れば好ましいものではない。しかし、子供が自発性を放棄しておとなしくなり、親の言う通りに動くようになれば、いわゆる“し易い子”となり家族の日々の暮らしは落ち着いたものとなる。それを良くないとして否定する権利はわれわれにはない。

それから次にやや技法的な問題となるが、反響行動 (co-action) (Werner, H. & Kaplan, B. 1963¹⁰⁾) の概念はわれわれに大きな手がかりを与えてくれる。反響行動はつられ行動であり、本来対人関係的意味合いは薄いのだが、そこを子供とのかかわりの窓口として位置づけていく時、単なるつられは対人関係的文脈を持った遊びに自然に発展していつてくれる。

例2. 有意味な発語のない子供で、言葉はジャーゴン (jargon) 様の段階。それまで母親は有意味な言葉を何とか言わせようと努力して報われてこなかった。こうした場合には、母親が子供のジャーゴンを反響的に返す (つまりマネする)、これを繰り返すと例1のような楽しい遊びになってくる (反響行動が自閉症児に受け入れられ易いのは、時を置かずして瞬時に自分の言動と同じものが現前してくることを通して、そこだけが周りから切り離され特別に励起された空間として立ち現れてくる為と筆者は考えている)。次に母親の方からジャーゴン

にリズムや抑揚を加えて提示すると、反響的に子供から返ってくるが、徐々に対人関係的文脈を持ったコミュニケーション遊びになっていく。

そして後にも触れるが、言語獲得という点から見てもこの反響遊び的にかかわりは良い影響をもたらす易いようである。

3-2 同一性保持

一般に自閉症児は同じ事物、同じクセ、同じ道筋、同じタイム・スケジュール等に固執して変化を受けつけない、無理に変更させようとするとうパニック(panic)を起こしかねない。

この同一性保持には、乏しい安全保障感、Blankenburg, W. (1971)¹¹⁾の言う「自然な自明性の喪失」を補償する意味合いがあり、いつもと同じ事柄で、身のまわりをなじみあるものでかためることで、いつもと同じ自分を見出して少しでも安心したい気持の表われと考えられる。

したがって禁止するより、子供のこうした気持を汲んだ上で尊重し、積極的に応援した方が（こうした具体的行動を通して、子供は自分の気持が理解されたと感じられる、心のこもらない機械的な応援は意味がない）良い影響（臨床像の安定化や progression）をもたらす易い。

場合によっては、同一性保持を活用し子供の世界を広げて行くアプローチが可能となる。例えば時刻表に固執してる子供がいるとする。それに対し母親は「そんな事ばかりしてるから人とか他の物に関心が向かわないのでは？」「そんなしてるから言葉を憶えないのでは？」と考え、何とかやめさせようとして却って固執を強化する結果になりかねない。母親の不安には無理からぬものがあり、その気持は十分に受け止めねばならない。しかし命題の立て方にはやはり無理があるようだ。「今、子供にはそれが必要なのだ」と考えるところから始めた方が良いようである。「なぜ必要か」と問うてみても近似的推測の域を出ないし、こちら側からの安易な解釈を受けつけない生きた迫力がある。だから「なぜかはよく解らないが、とにかくそれを必要としているのだ」と考え、とりあえずこちらも乗って試してみてもどうであろうか。その方が却って結果

的に意外な展開が起きてくるようだ。

例えば時刻表を通して数字，時刻，漢字（地名）に関心が出てくる。鉄道路線図を通して地図に興味広がる。親のちょっとした工夫により地図の上での旅行遊びができる，汽車や電車に興味が出て乗りたくなる。乗ってどこかへ行けば，自分の家を中心にして色々な場所が心の中でつながってくる。そして行った先でまた新しいものと出会い，徐々にではあるが世界が広がっていく。また教育的立場から見ても（筆者の家庭教師としての経験），時刻表を通して目的地までの料金の加算，釣銭の計算，所要時間の計算，漢字，地図の上での場所探し等に子供は興味を持って臨むのでのみこみが早い。

このように時刻表一つをとってみても，そこから様々な事柄に興味を広げていくことは十分に可能である。そうして固執している所を中心にして，色々な方向に足場を作っていく世界を広げていく営みを通して，自閉症児の固執していた世界が相対化されていく。しかし何よりも，この世の中で興味を持てるものがふえていくこと自体が，子供にとって少しでも“生きる”手応えの増大につながっていくように思われるのだが，どうであろうか。

さて次に，前述のように他へ広げていくことで相対化できない場合にはどう考えたら良いのか。例えば困った癖として母親がしばしば訴える紙破りはどうであろう（暇さえあれば新聞紙，広告紙をビリビリと実に細かく破っていく）。

こうした場合，まず知っていて良い事は，どんなに否定的に見える事柄でも必ずどこか肯定的側面が認められる。例えば紙破りでも子供の気持の安定化に寄与している。だから仮にそれを禁止したとしても，他の癖に移行するだけである。よってこの種の癖は放っておき，その増減を子供の安定度のバロ・メーターとして見守って行けば良い（状態が悪くなると単に時間や紙の量がふえるだけでなく，より細かく破るのが一般的である）。

ある母親は「紙ちぎりにどういう意味があるかは知りませんが，何かつらそうに見える」と述べていたが，そこまで子供の気持をつかめているのは素晴らしいことである。筆者はこうした時によく“かさぶた”の例を思い出す。かさぶたは無理にはがさない，自然にとれるのを待てば良いのである。

さて同一性保持は尊重すると述べてきたが、時には壁を一緒に乗り越える場合がある（これは同一性保持に限らず、子供が新しい場面に立ち向かう際にも通用する）。

これも“その時”を読み取る心の眼が必要なのだが、「いける」とこちらが思えた時にはしっかりと支えて一緒に越える。子供が失敗してもひるまずに「大丈夫！ できるよ！」と強く支持して越えさせる。この種の成功体験は後の乱用を戒めていけば、母子共に大きな自信と実績として寄与する。

3-3 言葉

言葉をしゃべるようになるには構音器官の準備性、遊びの内容があるレベルにまで達している、動作に伴う発語、そして何よりも自分から人に働きかけて行けば必ず何か良い事が返ってくるという体験の積み重ね等が必要である。

言葉のない子供に無理に言わせるのは、母子共に苦痛な体験であるし、仮に言うようになっても場面に合った生きた使い方になりにくい。したがって例2に挙げた反響行動を応用してのコミュニケーション遊び、とにかく声を出すのが楽しいという経験を十分に積み重ねる。

その一方、日常生活の場面場面において、今子供が何を欲しているのか、何をしようとしているのかを察して、できるだけこたえてあげる。やがて子供が要求を訴えてくるようになれば（クレーン現象や指差し）できる限り充足させ、とにかく人に何かを訴えれば快の状態がもたらされる経験を積み重ねる。

そしてもし言葉が出てきたら、無理に言わせない、正確さを求めて言い直させない配慮が必要である。なぜなら、言葉をしゃべる度に不快な体験をさせられ続けるとしたら、しゃべるのをやめてしまうのは自然な成り行きだからである。実際、小学高学年以降になって言葉を全く言わなくなってしまう子供のほとんど全てに、親が無理に言わせようとした歴史が見出される。

言葉を広げていくには、遊びや生活を通して自然なものを、子供が興味を持っているものを中心にしていける方が良いでしょう。

さて会話的やりとりがある程度できるようになっても、時にオーム返式的に

相手の言葉をそのまま返してくる場合がある。答えるのが難し過ぎたり、感情にかかわる内容であったり、対人刺激が許容量を越えたり等色々な場合に認められるが、刺激を shut out して一種の思考停止の状態となる。その際、何とか言わせてやろう、聞き出してやろうとする気持からさらに押しでも答は返ってこないし、逆効果にしかならない。現実の日常生活の中ではオーム返しばかりしている子供でも、遊戯療法場面で治療関係が深まり、子供の心の reality に fit する場面になると驚くほど生きた答が返ってくる。しかし日常生活に帰っていくと、またオーム返しになる。この場面に起因する落差は示唆的と言えよう。やはり日常世界に魅力や reality を見出すのには、ある種の限界があるのだろうか。

3-4 多 動

いつも落ち着きなく動きまわり一つ事に集中せず次々に興味の対象が目まぐるしく移り変わる。身体がまるで自分のものでないような、あるいは心と裏腹に身体が勝手に動いたり、時にはロボットのような印象を与える子供もいる。

基本に身体像の問題 (Lacan, J. 1966)²¹⁾ が示唆されるが、それについては伊藤¹³⁾ (1984) の論文が興味深い。

さて家庭での具体的かかわりをどのように考えたらよいのか。基本的には身体を通してのコミュニケーションに持って行く方向を目ざす。子供の傍らにいて同じように身体を動かすことから始められる。一緒に走りながら、スピードに変化をつけてみたり、追い越したり追い越されたり、急に止まってみたり遊びとして楽しめるようになれば良い。そうすればやがて追いかけっこになっていく、それも追いかけられるのを歓声をあげて喜ぶところから始まっていくのが通例である。その他、くすぐり (これは自分で自分をくすぐっても全然くすぐったくない、対人関係があって初めてそう感じるのである)、肩車、両手を持って振り回す、相撲ごっこ等が挙げられる。身体のぶつかり合いを通してのやりとりであり、言葉のかわりに身体を使ってのコミュニケーションと言えよう。

それからこの多動は、一般に母親へのベッタリした甘えを経過すると治まってくるようである。どこかへ行ったまま家に帰ってこなくなる事態も消失する。筆者にはタコと糸の比喩が浮かぶ、糸のつながっていないタコはどこへ飛んで行ってしまいか見当がつかないが、糸がつながると（母と子のつながり）タコの動きは安定し、より生き生きと空を舞うようになる。

3-5 パニック

これは母子双方にとり危機的な状況である。現象的には「あちら側（自閉世界）からこちら側（この世）へ一気に越えようとする時に起こる」³⁾（井上 1982）したがって progression の契機ともなり得る。

具体的には自分の存在そのものがペケ（いわゆるテストにおけるマル・ペケのペケであり、自閉症児には紙の上の小さなペケが、時として自分の全存在がペケされたように受け取られてしまう）されたように感じた時、一気に混乱に至る、世界が突然暗転するような体験であり、なぜ自分が混乱したのか子供には解らなくなってしまいパニックが一人歩きするような事態もまれではない。

これはとにかく力づくでも止めてあげねばならない。親の体力、安定感、迫力が要請される場所である。しっかりと子供を抱え込み動けないようにし、丁度台風の風の息を見計らうように、子供の荒れが少し治まりかける時を選んで「大丈夫、何ともないよ」と落ち着いた声でしっかりと行ってあげる。もし同一性保持の対象にしているものが子供にあれば、それを与え、子供にとってのいつもの自分、いつもの現実に戻す。

次に自傷行為についてだが、これはパニックと似ており、できるだけ止めてあげねばならない。なお止めようとした人に aggression をぶつけてくるようになれば良い兆しと言えよう。なぜなら aggression を誰にもぶつけられず自分に向けていた状態から、人に自分の気持ちを訴え、対人関係の中で修復しようとする方向に転じたと解される為である（対人関係が絶望的で破壊的なものばかりではないとどこかで感じ始めたものと考えられる）。

8-6 禁 止

自閉症児の行動には、もともと親が禁止したいと思うようなものが多い。ましてや子供に自発性が出てきた時、事態はさらに深刻となり親は混乱の度を深め易い（「させてやりたいがされては困る」）。

山中⁷⁾ (1981) は「何を（どこまで）認め、何を（どこから）禁止するのかをあらかじめ決めて（線引き）おくのが良い」と述べているが、重要な指摘と思われる。線引きの目安は、その後始末に要する親の労力や損害の程度をどこまで引き受けるかである。だから親が子の気持をどこまで受け入れられるかとか、親の側の覚悟のあり方により相当の幅がある。

覚悟のあり方を考える上で意味深い例がいくつかあるが、その骨子は大体共通している。つまり子供の後を追いかけてながら何とかやめさせようとしていた母親が、ある時これでは切りがないので後始末の大変さとか損害を覚悟して引き受け子供の自由にさせる。すると、なぜか子供はそれをやめてしまうのである。つまり親が躍起になって禁止してる間は子供は盛んに抵抗するが、親が子のしてることを全面的に認めるとやめてしまう、そうなる子供が親の困ることをするのは何かのメッセージのように思われてくる。「あなたは私の事をどこまで受け入れる覚悟があるのですか」というような。こう考えると、逆に親が禁止したい気持を無理に抑えて受け入れる場合、子供がますますエスカレートしていく事実もうなづける。「あなたは受け入れたような顔をしています但本当はどうなんですか、どこまでやったら音をあげるんですか」と問われてるように思えてくる。全く誤魔化しのきかない関係である。実際むづかしい問題であり、頭で分っていても心の深いレベルでの覚悟がなければ意味がない。

さて一般的な禁止の話に戻るが、線引きができれば禁止する時は断固として禁止する、どういう言葉を使うかとか、言葉の量は問題ではなく、要は安定感を持った迫力が決め手と言えよう（その意味では普通いうところの“しつけ”と何ら変わりはない）。

一方、くすぐりながら禁止したり（つまり遊びに持っていくわけだが）、あるいは駆け引きめいた遊びに持って行っても良い（子供がいたずらをしかけた

時に大げさに禁止するポーズを取りかける，すると子供は一旦中断して親の様子をうかがう，こちらも中断して様子を見る。やがて子供は親の顔色を見ながら再びしかけてくる，親はまた禁止のポーズをとりかける。これを繰り返しているうちに深刻さがなくなり，いつしか遊びに変質していくことが多い。

4 援助する側に求められる基本姿勢

これまで述べてきた内容は，遊戯療法を通して得てきた筆者なりの自閉症理解の考えを背景としながらも，あくまでも発達相談的かかわりの中から母親達と共に考え，実践し，学んできた事柄，それも臨床的妥当性が比較的高そうに思われたかかわり方とその基本的考え方を中心にまとめたものである。

ただしここでぜひとも断っておかねばならないのは，これらの方法が教条的に使用された場合，そこに多くの副作用と弊害も生じ易いという事実である（もっともこうした危険性は，あらゆる治療的アプローチについて言えることではあるが）。母親が知的理解に流れ易くなったり，言われた事だけすれば事足りると錯覚したり，自分の力で精一杯子供と取り組む中から一つ一つ知恵をつかみ取り内的成長を遂げていく貴重なプロセスが乱されたりしてはならないのである。十二分な臨床的配慮が求められるところと言えよう。

では具体的にどのような配慮が必要となるのか。子供を知的に理解する方向にのみ腐心する母親にはそれを強化するような情報は与えない方が良いといった現実的，個別的なレベルのものはさておき，まず日頃母親が置かれている状況に対する可能な限り深い理解と謙虚さが求められる（口先だけのねぎらいなどは言わない方が良い）。それから本論文に掲げたものは，あくまでも母親達と一緒に考える中から出てきた結果をまとめたに過ぎない。結果よりも，それに至るプロセスの中で経験されてくる内容の方が大事であり，そうした経験を通して自閉症児を理解する原理のようなものを母親が，そして相談を受ける側も体得していくところにこそ主眼が置かれるべきである。

さらに具体的かかわりを提案する場合でも，少なくとも母親にある程度確からしいとっかかりのありかを示唆できれば良いのではないか。そこを手がかり

として子育ての楽しみとか自信を少しでも感じ取ってもらい、それをエネルギー源としてさらなる取り組みに立ち向かって行けるようになる手伝いができれば良いのだから。そうした実績の積み重ねが、わずかずつでも母性のなお一層の開発、発展に寄与して行ってくれるように、そんな思いで母親に臨む姿勢が必要と思われる。

5 おわりに

以上、今回は家族、特に母親の側から、生活の場からのかかわりの観点から自閉症児を眺めてきた。そこには遊戯療法の中で露わになってくる世界とは異なる面が見えてくる。しかしそれも自閉症児にとってはまぎれもない一つの現実であり、その中でも生きていかねばならない、そして家族でもある。

自閉症についての決定的な病因論、治療論がないままに、彼等は今成人期にさしかかってきている。しかも低年齢層に行くほど軽症化の傾向を呈しながら。

この軽症化も含めた自閉症現象の持つ意味に向けての、そして彼等にとって有意味となるような軸を持った今後の検討が待たれるところである。

文 献

- 1) Kanner, L. (1944): Early infantile autism. *J. of Pediat.*, 25, 211.
- 2) 井上亮 (1979): 電車を描き続ける男児. 京都大学教育学部心理教育相談室紀要, 第6号.
- 3) 井上亮 (1982): 続・電車を描き続けた男児——自閉世界から「こちら」側へ投げかけられた橋. 京都大学教育学部心理教育相談室紀要, 第9号.
- 4) 山中康裕 (1976): 早期幼児自閉症の分裂病論およびその治療論への試み. 笠原編「分裂病の精神病理5」東京大学出版会.
- 5) 村瀬嘉代子 (1980): 子育ての喜びに気付くまで——自閉症児をもつある母親との面接過程. 臨床心理 ケース研究3 誠信書房.
- 6) Sullivan, H. S. (1956): *Clinical studies of psychiatry*. (中井久夫他訳 1983 精神医学の臨床研究 みすず書房)
- 7) 山中康裕 (1981) Personal communication.
- 8) Bettelheim, B. (1967): *The empty fortress*. (黒丸正四郎他訳 I 1973, II 1975 自閉症うつろな砦 I, II みすず書房)
- 9) Piaget, J. (1945): *La naissance de l'intelligence chez l'enfant*. (谷村覚他

- 訳 1978 知能の誕生 ミネルヴァ書房)
- 10) Werner, H. & Kaplan, B. (1963): Symbol formation. (柿崎祐一監訳 1974 シンボルの形成 ミネルヴァ書房)
 - 11) Blankenburg, W. (1971): Der Verlust der natürlichen Selbstverständlichkeit. (木村敏他訳 1978 自明性の喪失——分裂病の現象学 みすず書房)
 - 12) Lacan, J. (1966): Ecrits, Seuil. (佐々木孝次他訳 I 1972 II 1975 エクリ I, II 弘文堂)
 - 13) 伊藤良子 (1984): 自閉症児の〈見ること〉の意味. 心理臨床学研究 1, 2, 44—56.